



## 最新情報

## ■5万人を超えました

お陰様で、2012年11月20日に調査に参加いただいたお母さんの登録が当初の目標である10万人の半分にあたる5万人を超えました。2013年1月15日時点の登録された参加者数は、お母さんが55,778人、お父さんが25,918名、35,000名を超える「エコチルベビー」も誕生しています。みなさんのご理解とご協力に感謝するとともに、ご協力に応えるためにも、調査を円滑に進めていかなければいけないと気持ちを新たにしました。

## ■妊娠中の喫煙状況

前回は、妊娠初期血液検査で調べたスギ特異的IgE(アレルギーに関する検査項目)の集計結果をご紹介しましたが、今回は、みなさんに時間を割いてご回答いただいている質問票(妊娠初期)で調べた喫煙の状況についてご紹介します。2012年10月末までに登録された約4万人のお母さんについて集計してみると、妊娠初期の段階での喫煙率は5.0%でした。図2には、年齢階級別の喫煙状況をまとめましたが、20歳代の方ほど妊娠中でも喫煙している方が多い傾向がありました。これまでの研究から、妊娠中の喫煙はお腹の中の赤ちゃんの成長に

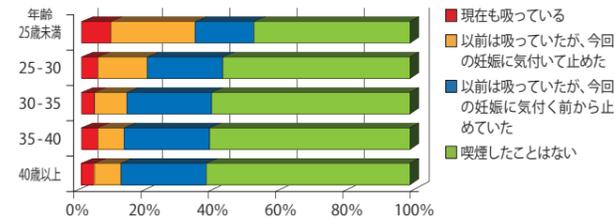


図2 妊娠中の母親の喫煙状況 (妊娠初期の質問票の回答の集計結果)

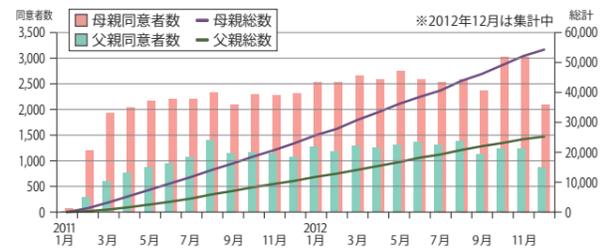


図1 同意者数 (2011.1 ~ 2012.12)

影響するだけでなく、そのお子さんが生まれてからの健康にも影響する可能性(乳幼児突然死症候群の原因、様々な病気の引き金となる肥満の原因など)が指摘されています。妊娠初期で喫煙をやめれば、赤ちゃんへの影響は小さくなると考えられています。お子さんが生まれた後でも、禁煙することは、お母さんご自身の健康はもちろん、お子さんの健康増進につながると考えられます。出産後に喫煙を再開される方もいらっしゃるようですが、せっかくやめたタバコですから、そこはぐっとこらえましょう。また、妊婦さんやお子さんがたばこの煙を吸うこと(受動喫煙)の健康影響も指摘されていますので、お母さんだけでなくご家族の方もたばこは控える、少なくともご自宅での喫煙は避けるように配慮をお願いします。

エコチル調査は長期にわたる取り組みなので、環境要因が子どもの健康に与える影響を解明するという大きな目的についての結果報告までには時間を要しますが、みなさんからいただいた貴重な情報は適宜集計し、今後もニュースレターで報告させていただきます。

## ユニットセンター巡り —大震災を経験して—

## 福島ユニットセンター

福島ユニットでは平成23年1月31日より、調査対象地域の福島市、南相馬市、双葉郡の協力医療機関においてリクルートが開始されました。しかし、残念ながら3月11日に東日本大震災、その後の東京電力第一原子力発電所事故に見舞われました。調査対象地域が限定されている本調査へ、震災直後より調査対象地域外の妊婦さん、医療機関から全県下での実施を望む声がありました。多くは放射線に対する不安の声であり、震災後の一時期は同意率が100%で推移しました。化学物質に特化したエコチル調査では当時の声に十分にお応えすることに困難を感じていましたが、「家族の半年ごとの質問票調査による子どもの見守りは、今までの子育て環境にはない綿密な見守り環境となります。万が一にも何らかの兆候が見られた時は早期に医療機関に相談することが可能となり、将来を通じて不安に 대응することができます。」と説明してきました。一方、不安解消の観点から、「放射線の健康影響を評価するためのデータをできる限り収集し、これまで予期されなかった影響が万一生じることがないか、見守っていくことが重要である。」という考えにより調査対象地域が福島県全県下に拡大されました。その結果、本年10月1日から対象地域が14市町村から59市町村へ、協力医療機関が18医療機関から50医療機関へ、そして、リクルート予定人数も6,900人から15,900人になりました。

課題として、「放射線障害への不安」、「単なる調査では受け入れられない」、「協力体制の確立」があげられますが、適切なリスクコミュ

ニケーションと支援体制の確立、いかに参加者に寄り添うか、そして、参加者、県民への十分な説明が求められています。エコチル調査福島ユニットセンターは微力ながら「福島で産み育てる」ことをお手伝いすることが最大の課題ととらえ取り組んでいます。日本各地で福島からの避難者がお世話になっていますが、今後とも宜しくお願いいたします。(福島ユニットセンター長 橋本浩一)



## 宮城ユニットセンター

東日本大震災から2年近くたとうとしています。宮城ユニットセンターの対象地区の中には、甚大な被害のあった気仙沼市、石巻市、岩沼市、南三陸町、女川町、亶理町、山元町が含まれています。あの時のことを振り返ってみると…大震災は平成23年1月24日に調査を開始してから46日後のことでした。このまま調査の継続ができるのだろうか…中止ということもあるのだろうか…ということが頭をよぎりました。しかし、まずは、自分たちにできることをやろうと、エコチル調査のスタッフも全員で罹災した自治体や医療機関に全国から頂いた支援物資を配ることを優先しました。その際に、「エコチル調査はどうなったの?再開してほしい。」という声も徐々に聞くようになってきました。このような状況下でもエコチル調査のことを心配し、また期待してくれる方がいることがうれしく、それからは調査を継続し、

## 教えて!エコチル調査! 血液などの試料はどこに行くのでしょうか?

今回は、皆様からご提供いただいた血液、尿、母乳および髪の毛などの貴重な試料が、エコチル調査でどのように保管、管理されているのか、血液を例にとりてご紹介いたします。他の試料についても同様の過程をたどります。

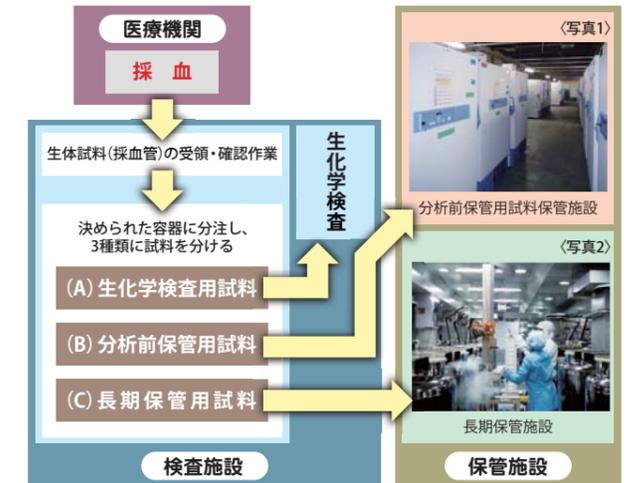
全国の協力医療機関で採取された血液は、まず参加者識別IDが付けられ神奈川県内の検査施設に集められます。ここでは、最初に参加者識別IDと生体試料管理用IDとの照合が行われます。その後、(A)生化学検査用、(B)分析前保管用、(C)長期保管用の3種類に分けられ、さらに検査(測定)の項目別に決められた容器に小分けされます(これを分注といいます)。(A)の試料は直ちに生化学検査が実施され、総コレステロール、赤血球、白血球などの分析が行われ、結果を皆様にお返ししています。(B)の試料と(C)の試料は-80℃の冷凍庫で一時的保管され、その後、それぞれ埼玉県内と茨城県内の保管施設に輸送されます。(B)の試料は-80℃の冷凍庫に保管され、リクルート期間の終了する平成25年度から予定に従って、順次化学物質の分析のために取り出されます(写真1)。(C)の試料は、将来なにか問題になった物質を研究するため、-80℃の冷凍庫または-160℃の液体窒素タンクに保管されます。小分けされた血液や試料の総数はすでに150万に達しています(写真2)。

これらの試料は、生体試料保管管理システムによって、採取から保管に至るまで厳重に管理されています。それぞれの試料がどなたの試料なのかという情報は、ごく限られた情報管理者のみが取り扱いを許され、試料を保管、分析する者はもちろんデータ解析を行う者

にも分らないシステムになっています。

エコチル調査では、皆様からご提供いただいた貴重な試料について詳細に分析を行い、この分析データをもとに化学物質が子供たちどのように影響を与えるのかを解明していきます。化学分析は、計画に基づいて順次行われるのに加えて、子どもたちの健康状態にも合わせながら行われていきます。そのため長期間におよぶ調査となりますがどうかご協力をよろしくお願い致します。

## 血液の採血から回収・分注・保管の流れ



今までどおり行っていくことが復旧の一つであると考えようになりました。

調査は、まず内陸部である大崎地区から再開し、震災から5ヶ月とたたない8月1日、宮城ユニットセンターのすべての対象地区で調査を再開することができました。対象地区となっている自治体の皆様、協力医療機関の先生をはじめとするスタッフの皆様の協力のおかげだと思っています。

そして、「このような時期だからこそ調べてほしい」、「私にできることであれば、協力したいと思う」というママたちの声を聞きました。そのような言葉を聞くたびに、エコチル調査の重要性をしみじみと実感するとともに、人との繋がりは本当に大切だと感じました。

石巻地区は、被害がひどかった地区の一つです。エコチル調査の協力医療機関であり、その地区の災害医療の中心となって機能していた石巻赤十字病院では、毎年秋に「赤十字健康まつり」が開催されます。平成23年からはそこにエコチル調査もブースを出させていただいています。今年は、子ども番組「ポンキッキ」でおなじみの「ガチャピン・ムック」と一緒に参



(c)FUJITV KIDS

## ●エコチル調査のサポーターになりませんか

参加者のみなさまやご家族はもちろん、参加者以外の方でもこの調査の趣旨にご賛同いただける方は、下記のエコチル調査HPからサポーター(応援)にぜひご登録ください。環境省から調査の進捗状況や最新情報などをメールマガジンでお届けします。

(サポーターページでは、過去のメールマガジンを読むこともできます)

<http://www.env.go.jp/chemi/che/>



モバイルサイト

加しました。なぜ「ガチャピン・ムック」なのかというと、宮城ユニットセンターは、Miyagi Unit Center(略して「MUC」)なので、「ムック」に、名前繋がりで応援してもらっています。ムックとガチャピンは、来場してくれたお子さんたちと体操をしたり、エコチルブースでパンフレットを配ったりと大活躍してくれました。

ムックたちと触れあう人たちは、みんな笑顔にあふれていて、震災のことは、忘れてしまうほどでした。

しかし、まだ大きな災害に罹災したところだと、現実に戻されることもあります。記憶に新しいのは、平成24年12月7日の余震でしょうか。夕方であったこともあり、ユニットセンターのスタッフも帰宅途中での地震でした。調査対象地区となっている沿岸部の自治体には、津波警報が出されました。調査スタッフ一人一人の安否を確かめるため、なかなかつながらない電話を何度もかけ、声が聞けたときにすごくホッとしたことを覚えています。緊急に市役所に避難したスタッフからは、津波警報を聞いて泣き出す女子高生がいたことを聞きました。心の復旧・復興もまた今後の課題かと痛感しました。まだ、大震災の爪痕が残る中で行っているエコチル調査ですが、みんな手を取り合い、ユニットセンタースタッフ一同がんばっていきましょう。

(宮城ユニットセンター 櫻井香澄)

